

追 悼



故 繁田幸男 先生 略歴

(昭和4年4月18日生～平成29年7月1日没)

<略歴>

昭和28年 3月 大阪大学医学部医学科卒業
昭和29年 3月 大阪大学医学部附属病院実地修練修了
昭和33年 4月 大阪大学医学研究科大学院(第1内科)入学
昭和33年 3月 同 大学院修了
昭和33年 7月 医学博士(大阪大学)
昭和33年 4月 大阪大学医学部研究副手(第一内科)
昭和34年10月 大阪大学医学部助手(第一内科)
昭和36年 6月 米国ブルックヘブン国立研究所医学研究センター
昭和42年10月 大阪大学医学部講師(第一内科)
昭和52年 7月 大阪大学医学部助教授(第一内科)
昭和53年 4月 滋賀医科大学教授(第三内科)
平成7年 3月 滋賀医科大学退官

<学会活動>

日本腎臓学会学術評議員
日本腎臓学会法人評議員
日本腎臓学会理事
日本腎臓学会功労会員
日本腎臓学会名誉会員

<日本腎臓学会 委員会活動>
学会あり方委員会委員

<受賞>

昭和55年 ベルツ賞一等賞受賞
平成29年 叙位 従四位, 叙勲 瑞宝中綬賞

繁田幸男先生を偲ぶ

滋賀医科大学内科学講座 糖尿病内分泌・腎臓内科

前川 聡

滋賀医科大学名誉教授 繁田幸男先生は去る平成 29 年 7 月 1 日、88 歳の生涯を閉じられました。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生は昭和 4 年 4 月 18 日神戸市生まれで、大阪大学医学部医学科に進まれ、昭和 28 年に卒業、さらに大学院に入学され、昭和 33 年に医学博士(大阪大学)の学位を授与されました。昭和 34 年には大阪大学医学部第 1 内科助手に任用され、昭和 42 年 10 月からは大阪大学医学部第 1 内科にて講師を勤められ、昭和 52 年同助教授に昇任されました。この間、繁田先生は一貫して糖尿病学の研究、臨床に打ち込まれ、特に糖尿病性合併症の分野で大きな業績を挙げられました。こうした業績が評価され、昭和 53 年 4 月新設された滋賀医科大学内科学第 3 講座の初代教授に就任されました。

昭和 53 年 10 月の滋賀医科大学医学部附属病院の開院にあたり、第 3 内科科長に就任され、さらに昭和 62 年 4 月から平成元年 3 月まで同 附属病院病歴部長を併任されました。大学においては平成 4 年 4 月から平成 6 年 3 月まで滋賀医科大学附属図書館長を併任、平成 6 年 4 月から平成 7 年 3 月まで滋賀医科大学保健管理センター長を併任された後、平成 7 年 3 月に定年退官されました。なお、同年 4 月 1 日付けで滋賀医科大学名誉教授の称号を付与されておられます。

当時、インスリン分泌やインスリン情報伝達の研究が中心であったなか、糖尿病性細小合併症である腎症や神経障害、さらに、大血管障害である動脈硬化症や糖尿病性心筋症の研究を開始されたことは、その後のこれら合併症の糖尿病臨床における重要性を鑑みると、先生の先見性の高さを示すものであり、特に腎症については、病態解明のための基礎研究から臨床研究まで幅広く精力的に研究され、教室の基礎・臨床研究の礎となりました。



図 1 平成 3 年当時の繁田内科の医局会風景



図 2

日本腎臓学会では、学術評議員、法人評議員、理事として学会運営に尽力されました。平成元年6月には大津市にて第19回日本腎臓学会西部部会会長を務められました。また、平成2年12月には第2回糖尿病性腎症研究会世話人を務められ、平成4年、6年にも第4回、第6回同研究会世話人を務められています。

平成元年にスタートした厚生省糖尿病調査研究事業(総括班長：小坂樹徳先生)に腎症班長として参画され、「糖尿病性腎症病期分類」(平成3年度厚生省糖尿病調査研究事業報告書)の作成を主導され、繁田分類として、わが国における糖尿病性腎症の臨床、研究活動の道標となったのではないかと拝察しております。受賞歴として、昭和55年に「糸球体腎炎患者におけるNa排泄動態に関する臨床的研究—mesangium増殖と体位変換時のexaggerated antinatriuresis—」の研究課題でベルツ賞一等賞を授与されて、没後、叙位 従四位、叙勲 瑞宝中級賞を授けられています。

先生のお話は簡潔・明快で、またユーモアあふれる語り口は人の心をつかむものでした。滋賀医科大学の学生が「最も優れた教師」の人気投票をしたことがありましたが、繁田先生が見事第1位に選ばれたほどです。滋賀医科大学内科学第3講座発足当初は8名の医局員でしたが、私を含め多くの卒業生が第3内科に入局した一因になったのではないかと考えます。

先生はいくつかの国際シンポジウムを主宰されましたが、その原点となったのは海外トップクラスの研究室との交流でした。少ない教室員の時代から積極的に医局員を海外へ派遣され、教授に在任されていた17年間で20名を超える医局員が海外での研究生活を経験し、先端の研究技術と情報を持ち帰ることで、医局の研究活動を国際的なレベルに維持する原動力となりました。現在、繁田先生門下で日本各地の大学やナショナルセンターで教室を率いる人材が17名輩出されており、繁田先生もさぞ喜んでおられることと思います。

繁田先生が退官記念講演会でお話された「明日はまぶしい方がいいじゃないか」の言葉を胸に教室員一同臨床・研究・教育に精進したいと考えます。

繁田先生、有難うございました。安らかにお眠りください。